

## 「平昌冬季オリンピック」 「イベント・ジャパン2018」

神谷 直亮

2月の話題は、何と言っても「繋がる情熱」をテーマに掲げた「平昌冬季オリンピック」に尽きた。最も力を入れて現地の熱気を伝えたのはNHKで、2月9日から2月26日まで、日本国内5カ所で8Kパブリックビューイングを実施して盛り上げていた。関係者によれば、8K中継車2台と大勢のクルーを派遣してオリンピック放送機構(OBS)と共同制作を行ったという。

また、この絶好のタイミングを視野に入れてインタークロス・コミュニケーションが「イベントJapan2018」を、1月23日、24日に東京ビッグサイトで開催したのでレポートする。

### 「平昌冬季オリンピック」パブリックビューイング

まず、今回は2月9日に開会式の生中継をNHKみんなの広場・ふれあいホールで450インチ大スクリーンで視聴した。平昌から東京までNTTの光回線で伝送し、パナソニックの4Kプロジェクターを4台駆使しての8Kによる上映であった。

地上波やBSで視聴された読者が多いと思うが、開会式の映像で韓国らしさが出ていたのは、ロボットとドローンだ。ロボットの映像で最も印象的だったのは、本大会のマスコットになっている白い虎で、その他、青龍、朱雀、朝鮮半島に現存する動物

などいろいろと登場した。8K映像がすごいと思ったのは、金属製の鋭いつま先まで見事に映っていた。

ドローンは、終盤でスタジアムの上空にオリンピックのマークを描き出すパフォーマンスに使われた。夜空での短時間のショーだったので、8Kといえども数えきれなかったが1,000機以上の編成で、ギネスの記録に残る試みと思われた。欲を言えばきりが無いが、ミニドローンに搭載されたのは白一色のライトで、オリンピックカラーまで出し切れていなかったのが悔やまれる。細かいことを言うようだが、8K映像らしかったのは、1機だけ編隊に留まらず途中で墜落する姿がスクリーンで確認できた。

もう一点、8Kの大画面で見せてもらったことで気付いたのは、メインステージの傍に置かれた2台の360度VRカメラだ。サムソンの「360 Round」と思われたので、オフィスに戻ってからチェックしてみたら、今回のオリンピックでサムソンとOBSが共同で5GによるVR中継デモを行ったという。

さらに付け加えると、100人を超えるグループによる韓国の伝統打楽器チャンクの演奏がとても印象的であった。22.2チャンネルのスーパーハイビジョンならではの音響効果がいかに発揮されていた。集音装置の設置場所がはっきりしなかったが、

ステージの真上の絶好の場所のように思われた。

次いで、終盤の2月25日にもう一カ所、東京ミッドタウンのアトリウムで「平昌冬季オリンピック」を視聴する機会に恵まれた。当日のコンテンツは、男子ホッケーの決勝戦と女子マスタートの決勝戦であった。

男子ホッケーの決勝戦は、ロシアからの五輪選手(OAR)対ドイツで、4Kによる生放送であった。しかし、会場ではパナソニックの4Kプロジェクターを4台駆使して8Kで上映していた。音声は、5.1チャンネルであったが、バックをはじく音、選手同士やスティックが激しくぶつかり合う音など非常に臨場感に富んでいた。試合は、延長戦の末、OARがドイツを4対3で破り金メダルを獲得した。

マスタートは、今回が初となるスピードスケートの新種目で、金メダリストになった高木菜那選手を含む16選手が16周回のコースで競った。350インチの大スクリーンで再生された映像は、各選手の周回ごとの作戦を如実に捉えており、素晴らしかった。特に、鏡のようなリンクの氷面に選手の滑走映像がきれいに映っているのを確認できたのは、8K大画面ならではの感心した。

### 「イベントJapan2018」

「イベントのミッションを最大化する」と「イベントで日本に元気と笑顔を！」という2本の旗印を掲げた「イベントJapan2018」の会場には、タケナカ、ヤマハ、バルール、CREST、トラスト、アイレスなど72社が出展していた。

タケナカは、映像・音響コンテンツとハードのソリューションカンパニーとして知られる。今回、同社は、子会社のシムディ



写真1 東京ミッドタウンのアトリウムで行われたNHKによる「平昌冬季オリンピック」の8Kパブリックビューイングには大勢のファンが訪れていた。



写真2 東京ミッドタウンのアトリウムには、パナソニックの4Kプロジェクターが4台設置され8K映像の上映が行われた。



写真3 タケナカのブースでは、大画面カーブLEDと床置きLEDディスプレイが人気になった。



写真4 バルールは、ブースに意表を突くVRハングライダー・シミュレーターを設置して来場者に体験を促していた。



写真5 アイレスは、300インチのLEDディスプレイを搭載した車載型大型映像リフタービジョンカーを披露して注目を集めた。

レクトと共同で出展し、大画面カーブLEDディスプレイ、床置きLED、VR（仮想現実）体験、映像生成システム「A.I.G.A.」など多彩な展示とデモで会場を盛り上げていた。立体的な映像演出を実現する大画面カーブLEDディスプレイは、縦6面、横14面（1面のサイズは、50cm x 50cm）で構成されており、映像画面は2.6ミリピッチと2.9ミリピッチ（曲面部）を組み合わせていた。

床置きLEDは、その名称の通りフロアを活用して人の動きに応じて映像を変化させる「フォトス（Photo+）」と音を鳴らす「音たす（Oto+）」の相乗効果を発揮するインタラクティブコンテンツがウリである。今回は、タッチパネルで体験希望者のフォト撮影と音声録音を行い、その映像と音声を実際に床面に再生して見せていた。

VR（仮想現実）体験コーナーでは、HTC社（台湾）のヘッドマウントディスプレイ「VIVE」とハンドトラッカーを使う宝探しの体験デモが行われた。手にしたループをくぐるたびに空間映像が変わり、宝の在り処がリアルタイムに変化していくのがミソであった。

映像生成システム「A.I.G.A.」は、AI技術を使って名画の中に来場者の顔をリアルタイムに生成してみせるという離れ業を実現していた。筆者もゴッホの「星月夜」の前に立ってみたら、名画風スタイルにイメージ変換された自身の生成映像が出現して驚かされた。

「音のインフォメーションの世界を革新する」をキーワードに謳ったヤマハは、新開発の平面スピーカーを紹介し注目を集めた。

同社の「Flatone」と名付けたこのスピーカーは、意表を突く紙を主材料にした製品で、軽量、狭指向性、遠達性が特色だ。ブースの担当者は、「限られた場所で、特定のみにだけしっかりと音を伝えたいというシーンに最適」と説明していた。雑音の多いブースではあったが、実際にデモ用のA4サイズの「Flatone」の下に入ってみたら、確かにクリア音を聞くことができた

バルールは、意表を突くVRハングライダー・シミュレーターを設置して来場者に体験を促していた。ブースで実際に体験できたのは、日本のハングライダー代表選手の鈴木由路がブラジルで撮影した実写映像に基づいて、東京工業大学と共同開発した貴重なコンテンツとのことであった。ヘッドマウントディスプレイには、本当に空を飛んでいる実感を堪能できるように、クリーク&リバー社製のスタンドアロン型「IDEALENS」が使われていた。

CRESTは、同社が開発した「CPMap」と名付けたシステムによるプロジェクトマッピングを実演した。ブース中央に神棚を設置して厳かなデモを実施して「年末年始のイベント用にお勧め」とPRに余念がなかった。

愛知県小牧市に

本社を構えるトラストは、インスタ映えのする「水と光のコラボレーション」を2例紹介して注目的になった。その一つは、幻想的な水柱のアーチとその中を走る光によるファンタジートンネルで、もう一つは、レインボー噴水である。

アイレス（iRESS）は、車載型大型映像用のリフタービジョンカーを披露した。300インチのLEDディスプレイを搭載しており、6ミリピッチの画像を再生できる。ブースの担当者は、「レンタル用として3台用意しているのでぜひ活用して欲しい。スポーツイベントに最適」と売り込んでいた。スポーツイベントの実例として、プロレスの映像が再生され多くの来場者が見入っていた。

Naoakira Kamiya  
衛星システム総研 代表  
メディア・ジャーナリスト



**SMART SNG**  
HD 4K, 3D TV and IP-OVER SATELLITE ECO OPERATION

スマート・サテライト・ニュース・ギャザリング

<http://www.bizsat.jp>

ニッサン新エルグランド4WD  
5名定員  
1.2m径・自動捕捉アンテナ搭載  
車高2.2m 以下（地下駐車場可）  
3.6 KVA NMG アイドリング運用  
水圧エコ・ポール4m 搭載  
強化サスペンション  
国内（100V）海外（240V）対応  
IPコントロール  
ハイビジョン映像伝送  
運転席からワンマンオペレーション



設計・製造・衛星通信のことなら  
エーティコミュニケーションズ株式会社  
TEL: 03-5772-9125

